

《担当者名》福田真二

【概要】

音韻論、形態論、意味論、統語論の基本概念を学習しながら、ことばを構成する様々な要素を体系的に理解する。

【学修目標】

ことばの仕組みについての基礎を理解することによって、言語聴覚士として言語発達障害児・言語障害者の言語データを言語学的な視点から科学的に分析できる能力を身につける。具体的には、次のことを目標とする。

1. 言語の一般的特性について説明できる。
2. 音素と異音について説明できる。
3. 音声表示と音韻表示の違いについて説明できる。
4. 同化現象について説明できる。
5. 日本語アクセントの特性について説明できる。
6. 形態素と異形態について説明できる。
7. 語形成過程における派生と屈折の違いについて説明できる。
8. メンタル・レキシコンの基礎概念を理解し、その内部構造について説明できる。
9. 語彙範疇と機能範疇の違いについて説明できる。
10. 項構造について説明できる。
11. 基本的な文の統語構造を表記することができる。
12. 語順の違いを言語学的な視点から説明できる。
13. 格の基礎概念を理解し、その表示方法について説明できる。
14. 文法格と意味格の違いについて説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	ガイダンス(はじめに)	科目の概要、学習目標、講義日程、学習内容、評価方法、教科書、推薦図書、学習の準備、読書課題、キーワードリストの活用法、オフィスアワーの活用法、受講カードの作成法等を理解する。	福田真二
2	言語学入門(言語科学のすすめ)	言語学とは/言語の一般的特性/言語の普遍性と個別性/言語研究の目的と方法論 【読書課題：第3章「人間のことば」】	福田真二
3	音韻論(音の構造)	音素/異音/最小対/音声表示と音韻表示/相補分布/自由変異 【読書課題：第7章「音の構造」(pp.79-88)、第3章「音としてのことば」(pp.141-149)】	福田真二
4 ) 5	音韻論(音韻現象)	同化現象：口蓋化、有声化等/削除規則/挿入規則 【読書課題：第7章「音の構造」(pp.88-94)】	福田真二
6 ) 7	音韻論(韻律構造)	プロソディー/音節とモーラ/ストレス・アクセントとピッチ・アクセント/イントネーション 【読書課題：第3章「音としてのことば」(pp.131-140)】	福田真二
8 ) 9	形態論(語の構造)	形態素/異形態/自由形態素と拘束形態素/語幹と接辞/派生と屈折/合成語/複合語 【読書課題：第8章「語の構造」】	福田真二
10 ) 11	形態論(心的辞書)	心的辞書(メンタルレキシコン)とは/辞書項目/辞書表示/文法範疇：語彙範疇と機能範疇 【読書課題：第4章「語彙と辞書」】	福田真二
12	意味論(語の意味)	意味関係/多義性/同義語/反義語/上下関係/意味素性/選択制限 【読書課題：第6章「語の意味と文の意味」(pp.253-265)】	福田真二

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
13 ) 14	意味論 (意味役割)	頂構造/意味役割/意味役割の階層性 【読書課題： 第1章「ことばの研究」(pp.34-38)】	福田真二
15 ) 16	統語論 (文の構造)	統語構造の表記法/文の階層性/句の構造 【読書課題： 第9章「文の構造」(pp.106-112)】	福田真二
17 ) 18	統語論 (語順)	語順/句の主要部/主要部先行型言語と主要部後続型言語/世界の言語の語順 【読書課題： 第1章「ことばの研究」(pp.44-46)】	福田真二
19	統語論	文法関係/文法格/対格言語と能格言語/格助詞/格屈折/構造格と意味格 【読書課題： 第1章「ことばの研究」(pp.31-34)】	福田真二

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部(研究科)、学校の授業実施方針による

【評価方法】

期末試験 100%

【教科書】

中島平三 他 編著 「言語学への招待」 大修館書店 1996年  
井上和子 他 著 「生成言語学入門」 大修館書店 1999年

【参考書】

窪園晴夫 編著 「よくわかる言語学」 ミネルヴァ書房 2019年  
大津由紀雄 編著 「はじめて学ぶ言語学」 ミネルヴァ書房 2009年  
大塚高信 他 監 「新英語学辞典」 研究社 1992年

【備考】

開講日時が変則となります。詳細はガイダンス時に説明します。

【学修の準備】

予習は、指定された読書課題をして、理解できない部分をチェックしておくこと。(80分)  
復習は、講義の学習内容をまとめた勉強ノートを作成すること。(80分)

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

(DP3) 言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。